



2018.2.26

鈴木 恵一



SNS ~ デジタルつながりの関係性

SNS全盛期のいま、LINE、Facebook、Twitter、Instagram は、個人はもとよりビジネスや政治の世界でも人との結びつきを強める情報発信媒体として定着しました。しかし一歩間違えると、発信された情報がインターネット上で炎上し、組織や個人の命取りともなりかねない危うさが常につきまっています。トランプ米大統領の毎日複数回のツイートがいちいちニュースで話題になっています。国際関係に重大な影響を及ぼすような過激な発言もあるので、ヒヤヒヤすることもよくあります。



日本人がSNSにどれだけの関わりを持っているか、総務省の統計を参照してみました。SNSの利用率を全世代で見ると、2012年に41.4%だったのが、2016年には71.2%にまで上昇し、スマートフォンの所有率上昇に連動してSNSの利用が社会に定着してきたことがうかがえます。年代別にみると、10~20代は2016年時点で97.7%と高率です。

こうした状況に伴い、情報発信の内容・質が社会問題にまでなっています。子どもや若者のお手本となるべき大人のモラルが批判される事件、トラブルも増えています。

SNSを命や心を守る第三の居場所（第1の居場所は家庭、第2の居場所は学校・職場）にしている人もおり、そこに価値を見出す人が増えています。誰かの優しい言葉で自殺を思いとどまる人もいます。勇気づけられる人もいます。18歳選挙権に伴いSNSでの議論が活発化し政治



に興味を持つ若者が増えました。同じ趣味や考えを持つ人同士が交流するコミュニティ（共同体）として機能している例がある一方で、人の悩みや苦しみにつけ込む悪質な行為、不適切な画像や発言の投稿、人権を無視した誹謗中傷、非合法的取引、犯罪の温床にもなっています。

◆「ことば」の力

SNSの利用率が拡大する一方で、その繋がりが心の負担になっている人も確実に増えています。離れていても拘束されている感覚が強い。“既読スルー”で腹を立てる人がいる。陰口のつもりが、当の本人に伝わっていた。自ら関係を断つようなことをすれば、仲間はずれにされ、執拗に誹謗中傷のターゲットにされる。



相手を思いやることは現実社会でもSNSでも当たり前ではあるけれど、四六時中、そこに時間を費やし、心に大きなストレスを招いているとしたら考えものです。日常と非日常、現実と虚構の区別がつかないなど、いろいろな問題が発生しています。

自分が送った文章や言葉を相手がどう受けとめるかは、相手の心次第です。相手の気持ちを察した表現をしているでしょうか、言葉に温もりはあるでしょうか。自分が受け取ったらどう感じるか想像力を働かせているでしょうか。



「諸刃の剣」という表現があります。両辺に刃のついた剣は、相手を切ろうとして振り上げると、自分をも傷つけるおそれのあることから「一方では有用だが、他方では大きな害をもたらす危険がある」という例えです。

言葉には人に共感を抱かせ、喜びや安心を与えて心を温かくする力があります。しかし、表現の仕方ひとつで、人を傷つけ不快感や不安、悲しみを抱かせる凶器にもなるのです。言葉は人を生かし

もすれば殺しもする。

人は人と言葉を交わしながら生きてゆく。嬉しいときも悲しいときも、楽しいときも辛いときも、何かしらの言葉をかけ合いながら生きてゆくのです。優しさのつもりでかけた言葉が相手の重荷になることがあるかもしれません。想像力が必要です。自分で言った言葉に自分が苦しめられることだってあるかもしれません。逆に相手のことを思ってかけた言葉が自分を救うこともあります。言葉の力は不思議ですね。

必要以上に怯えることなく、相手のことを思いながら表現することを心がけたいものです。

